

2018/04/29

## 「全てが逆さま」

### ■逆さまめがね

人間の脳と物の見え方を検証する実験のひとつに、上下が反対に見える眼鏡というものがあります。この眼鏡をかけると、物が上下逆転して見えるので、かけた直後は不自由を感じますが、そのまま1週間も生活すると、驚いたことに、ひっくり返った状態を脳が補正し、普通に生活できるようになります。

もしかしたら、私たちが今見ている世界も、実際は正反対なのかもしれません。私たちの脳は、事実とは正反対の世界を、ひっくり返して理解しているのかもしれません。

ある時、イエス様は、「先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」(マタイ 19:30) と言って、次のようなたとえ話をなさいました。

「ぶどう園の主人は、朝早く出かけていき、1日1デナリの約束で、労働者を雇いました。その後、その主人は、午前9時と、正午、午後3時、そして夕方5時にも出かけていき、雇ってくれる人がいないために、市場で何もせずにいる人たちを雇い、ぶどう園に行くように言いました。

夕方になり、賃金を払う時になると、主人は最後に来た人たちから順番に、それぞれ1デナリずつ渡しました。朝早くから働いていた人たちは、それを見て、自分達はもっともらえるだろうと思いましたが、やはり1デナリずつでした。すると、最初に来た労働者達は、「なぜ1時間しか働かなかった人と、1日中働いた自分達が同じ賃金なのか」と主人に文句を言いました。」(マルコ 20:1-12 要約)

これに対して、ぶどう園の主人は、次のように答えています。

「『私はあなたに何も不当なことはしていない。あなたは私と一デナリの約束をしたではありませんか。自分の分を取って帰りなさい。ただ私としては、この最後の人にも、あなたと同じだけ上げたいのです。……』このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」(マタイ 20:13-16)

このことを通して、イエス様は、人の価値はどれ位働いたかという行いにあるのではなく、人の価値は人にあると教えておられるのです。

この世では、1時間働いた人と、8時間働いた人とでは、賃金が異なるのが当たり前です。つまり、この世は、人の価値を行いによって決めているのですが、神の国では全く違うのです。

イエス様の教えを、一つ一つ丁寧に見ていくと、すべてこの世とは逆のことを教えていることがわかります。たとえば、私たちは、何を着ているか、何を持っているか、どんな家に

住んで、どんな車に乗っているかなどに興味を抱き、その人の価値を推し量っています。それがこの世の物の見方です。しかし、神の国はそうではありません。

「なぜ着物のことで心配するのですか。野のゆりがどうして育つのか、よくわきまえなさい。働きもせず、紡ぎもしません。しかし、わたしはあなたがたに言います。栄華を窮めたソロモンでさえ、このような花の一つほどにも着飾ってはいませんでした。」

(マタイ 6:28-29)

ソロモンとは、当時の歴史上、最も金持ちの王様です。そのソロモンですら、野の花ほどにも着飾ってはいなかったというのは、人は神が造った作品であるから、着飾る必要がないほど、その人自身で十分美しいということです。私たちは皆、神に似せて造られ、最高に素晴らしい神の栄光を表しているのです。

この点においても、私たちの物の見方は、事実と逆さまです。私たちは、神様にとってまったく意味のないものに価値を見出しているのです。

#### ■人の弱さは誇り

私たちは、偉大なことや素晴らしいことを行なう人を見ると、〇〇が出来ていいな、出世していいな、大切なことを任せられていいな、などと羨ましく思うものです。しかし、イエス・キリストは、次のように言われました。

「まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。しかし、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。」

(マタイ 11:11)

キリストの道を整え、イエス様にバプテスマを受けたヨハネほど、この世で栄光を受けた人間はいないだろうと、人間は考えます。しかし、イエス様は、あなたがたが、たいしたことないと思っている人ほど、天の御国では偉大だと言われました。私たちの価値観と天の御国の価値観は、まったく違うのです。

イエス様は、私たちを体にたとえ、一人一人が体の一部分だと言われました。目や手や足などは、外から見ても、大切な働きをしていることがわかります。しかし、人の体の内部には、それを支えている小さな部分がたくさんあります。私たちが、日頃気づいていない部分も、実は大切な働きをしており、それぞれの部分が互いに支え合って生きているのです。

三位一体の神も、父と子と聖霊が互いに支え合って一つの神として存在しておられます。この地上ではイエス・キリストの働きが大きいように思われがちですが、神という存在が成立するには、それぞれ互いの存在が必要なのです。

人は、関わりの中でしか存在できません。人類が存続し続けるには、男と女と子どもが必要です。存在するということ自体が、関わりを持っているということなのです。そして、そ

の関わりの相手は、互いに平等な立場です。人は、強さを誇り、弱さを恥と考えますが、神は、弱さこそが誇りであると考えます。神は、人の弱さを助けることができますが、人の強さとは関わるできません。

人にとって、弱さこそが重要です。弱さこそ、神と関わるができる大切な宝なのです。

「しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。」(Ⅱコリント 12:9-10)

## ■ 困難こそ希望

この世の考え方で物事に取り組む時、困難な出来事にぶつかったら、あきらめるしかありません。しかし、聖書は、困難こそ希望だと教えています。

「私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。」(Ⅱコリント 4:8-9)

イエス・キリストは、このことを、身をもって示してくださいました。イエス様が迫害の末に十字架で殺された時、弟子達は、もう終わりだと思ってあきらめて逃げていました。しかし、イエス様は3日後に復活して、ご自身を人々に現してくださいました。行き詰ってもうダメだと思う時こそ、神の栄光が現れる時なのです。

聖書は、失望することをやめよ、困難を感謝せよ、試練を喜べよと、繰り返し教えています。このことを可能にしてくれるのが、イエス・キリストの十字架なのです。イエス様の十字架を思い起こすことが、真理はこの世とは逆なのだと思える力になります。

キリストの十字架、それは確かに、患難ではなく、希望です。

## ■ 裁くのではなく、受け入れる

この世の中では、悪いことをした人を裁きます。また、傷つけられたり、悪口を言われたりすると、赦せないと思います。私たちが、人を裁くのは、裁くことで自分が偉くなったような気になり、気分がいいからです。そのため、人々は裁くことが大好きです。しかし、これは、神の国のやり方とは正反対です。

「もしあなたがたが人を赦すなら、私もその人を赦します。私が何かを赦したのなら、私の赦したことは、あなたがたのために、キリストの御前で赦したのです。これは、私たちがサタンに欺かれないためです。私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。」(Ⅱコリント 2:10-11)

サタンの策略とは、互いに裁き合わせることです。確かに、人を裁くと、一時的には、偉くなったような気になって気持ちいいかもしれませんが、かえって自分を貶めて、自分を追い込む結果になるのです。

裁いても、平安は手に入りません。裁くことによって、自分自身も裁かれるため、平安など来るわけがないのです。裁けば裁くほど、自分自身がますます傷つきます。

「もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渴いたなら、飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」(ローマ 12:20-21)

悪いことをした人を裁いて排除しようとする、私たちは、自分自身を受け入れられなくなります。

ですから、聖書は、罪人をそのまま受け入れるように教えています。人は本来良きものであり、罪を犯すのは病気だからであり、本来の姿ではありません。ですから、罪人のまま受け入れて愛するように、神の国は教えています。愛とは受け入れることです。

神様は、排除して何かを作りあげるのではなく、受け入れて築き上げる方です。愛によって建てあげることによって、神の国は成り立っています。

しかしこの世は、愛ではなく死が中心です。死は有限であり、いつか滅びるものです。人々は、死とは裁きだと思っています。私たちの中には常に罪責感があり、人は裁かれることを恐れています。そのために、自ら人を裁き、自分は立派だと思込もうとしているのです。

罪を裁くのは、間違った対応です。愛をもって受け入れることが、悪に打ち勝つ唯一の方法です。イエス様は悪を滅ぼすために裁きましたが、力で制したわけではありません。すべてをご自分の身に引き受けて十字架に架かることで、悪を征服したのです。イエス様は、悪をもって悪に勝ったのではなく、善をもって悪に打ち勝ったのです。

## ■ 正常な形に戻すには

この世は、事実とはさかさまなことが、当たり前です。神のいのちによって造られた私たちの魂は、自分のやることは本当にこれでいいのだろうかという疑問を抱き、いつも何かおかしいと感じながら生きています。この矛盾が、人の感じる虚しさなのです。

何をやっても満たされなかったり、平安がなかったりするの、私たちがさかさまの生き方をしているからです。私たちの魂は神のいのちに属しています。たとえこの世があなたは立派だと賞賛しても、神のいのちは虚しさを感じるのです。

ソロモンは、この地上のすべてを手に入れましたが、結局すべては虚しいと悟りました。私の求めているものはこのような生き方ではないと気づいたソロモンは、神様から知恵をいただき、箴言を書きました。

私たちの見え方を正常な形に戻し、この虚しさから抜け出す方法はただ一つ、自分が罪深い人間だと気づくことです。本当に自分の罪深さに気づくなら、自分でどうにかできることではないとわかって、神様に助けを求めずにはいられなくなります。神に助けを求めないのであれば、本気で罪に気づいたのではなく、どこかでまだ自分は立派だと思っているのです。

うわべが立派な人は、なかなか自分が罪深いことに気づくことができません。兄から長子の権利をうばったヤコブは、40年かけて自分の罪に気づき、神様に助けを求めました。彼は、知恵を働かせて多くの財産を築きましたが、自分のいのちを守るために家族を危険に遭わせるような人物でした。その彼が、一晚中神に叫んで格闘し、神に必死にしがみついて助けを求め、変わったのです。

この世は、罪を裁きますから、私たちは必死になって罪を認めようとはしません。しかし、神様の前で罪を認めるということは、無条件で赦されるということです。そればかりか、神様はあなたを弁護してくださいます。

この世では赦されないことが、神様に赦されると知った時、私たちの眼鏡が変わるのです。こんな私でも無条件で愛されていると知った時、私たちの目を覆っていた覆いが取り除かれ、物事がはっきり見えるようになるのです。それを受け取れるかは、「神様助けて下さい」と言えるかどうかにかかっています。

自分が立派だと思っている限り、眼鏡はかかったままであり、人を裁く生き方から抜けられません。自分が罪人だと知り、赦されたことを受け入れるなら、物事がはっきり見えるようになって、人を裁かなくなり、感謝できるようになります。

私たちが自分の罪を知ることができるように、神様は人類に聖書を与えてくださいました。健康診断や精密検査でCTスキャンを用いるように、罪という病気にかかっているかどうかを、聖書によってスキャンすることができます。もし、自分に病気の自覚がなくても、スキャンによって病気が見つかったら、病院で治療を開始するでしょう。人は皆、神のことばを通して自分の罪に気づき、神の治療を受けることが必要なのです。その治療とは、十字架の全き愛を受け取ることです。

聖書は、人に対してバカと言ったら殺人と同じ罪だと言っています。人をさばき、バカにするのは、殺人罪だとみなされます。また、情欲を持ったら姦淫と同じだと言っています。聖書は私たち全員を、罪の下に閉じ込めたと言っています。それは、すべての人がイエス様によって救われるためです。

私たちが救われるには、イエス様を信じるしかありません。本当に自分が罪人であることに気づけば、イエス様に助けを求めずにはいられません。その時、イエス様は、私たちを無条件で受け入れて下さいます。罪は墮落ではなく、機能の低下です。低下した機能を上げるためには、リハビリが必要です。

私たちは皆リハビリ中ですから、リハビリ中の人間を裁く必要はありません。神は私たち

を裁かず、むしろ何とかしようと助けてくださいます。このことに気づくと、眼鏡が外されて、物事が正しく見えるようになり、神に愛されている自分を知ることができます。そして、これまで考えてきた人の価値は、すべて逆だったと気づくのです。

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。」(I ペテロ 2:24)

「キリストの打ち傷のゆえに私たちはいやされた」と聖書は教えます。ここでは、「いやされた」と過去形で訳されていますが、ギリシャ語は、真理を表す時も過去形を使います。つまり、ただ単にいやされたという事実ではなく、キリストの十字架によっていやされるのは、真理だと表しているのです。

キリストの十字架は、私たちの罪を癒し、健康にします。ものごとがさかさまに見える眼鏡がはずされて正しく見えるようになり、これまで見えていた人生とは全く別の人生が見えるようになって、感謝が満ちあふれるようになるのです。